

## 沖 縄 の 織 機 ( I )

與 那 嶺 一 子

(沖縄県立博物館)

Loom of OKINAWA

Ichiko YONAMINE

(Okinawa Prefectural Museum)

### はじめに

沖縄の染織は、他の地域に類がないほど豊富なことで知られている。これまでは、織物としての素材・技法の面での調査・研究が先行し、織機または織に関係する道具についての調査が充分に行われていたとは言えない部分があった。沖縄の織物を広く考察する意味でも、布を織り上げるまでの織機とその他織りに関する道具についての調査は必要であり、今回は、織機とはどういうものであるか、文献などにみられる織機とはどのようなものだったかという点から、沖縄の織機について考えてみたい。

### 織機とは

織機とは、経糸と緯糸によって構成された織物を作り出す装置ということで定義づけられているが、その種類はさまざま、多数の部品によって構成された複雑な織機から、単一の部品のみで織機としての役割を持つものもあり幅広い。織機を構成する要素は、①経糸を張っておくための保持具、②経糸の開口のための開口具、③経糸開口部分に緯糸を送る緯入具、④経糸と緯糸の組み合わせを密にするための緯打具の四つに分けて考えることができる。

図1、2の織機に置き換えて考えてみるとこうなる。図1の場合、布巻と緒巻きによって経糸が保持され、綜糸、中筒、まねきが開口のための道具で、杼が緯入具と緯打の役目を果たす。このような織機は、地機、腰機、いざり機、下機、神代機などと呼ばれ、明治

大正頃までは全国各地でみられ最も普及した手織機である。以後、地機の名称を使用する。

図2の場合は、経糸保持具は、緒巻と千切、布巻で、開口具は二枚以上の綜統、緯入具は杼、緯打具は箠で、長機・京機・大和機などと呼ばれるが、座位置が地機より高いことから「高機」の呼び名が一般的によく知られている。以後、高機の名称を使用する。

これらの道具は能率よく織物を製作するために、改良され、図に見られるような地機、高機へと発展してきたのであり、織機が発生した段階では、経糸保持のための道具をのぞき、他の要素は道具というよりは人力でまかなわれていたと考えられている。

### 沖繩の織機

沖繩で最も古い織機は、考古資料がまだ発見されておらず、文献による。最も古い記録は『李朝実録』の『成宗康靖大王実録』にあり、1477年、三人の朝鮮漂流民が、漂着先の与那国島で使われている織機について次のように報告している。

一、織布用箠杼、模様與我國同、其他機械不同

この報告から、当時の織機が「箠と杼が用いられており、その点は朝鮮と同じであるが、他の機械は同じではない」ものであることが分かる。

『沖繩織物の研究』で田中俊雄は、この『李朝実録』から15世紀当時、与那国で使われていた織機について次のように考察している。

『いわゆる Frame less-loom 階段の織機だったと思われます。手取ばやくいえば、アイヌや台湾の諸族が現在もちいているような機具が15世紀の与那国ではいまだにおこなわれていたのではなかったか、だから朝鮮人たちは「箠や杼をつかって織物をおるやりかたが

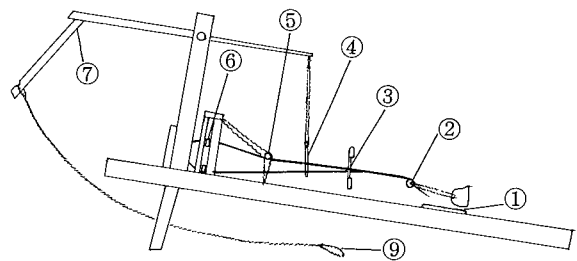


図1) 地機

- ①腰板 ②布巻 ③箠 ④綜糸 ⑤押え棒 ⑥中筒  
⑦緒巻 ⑧まねき ⑨足引なわ

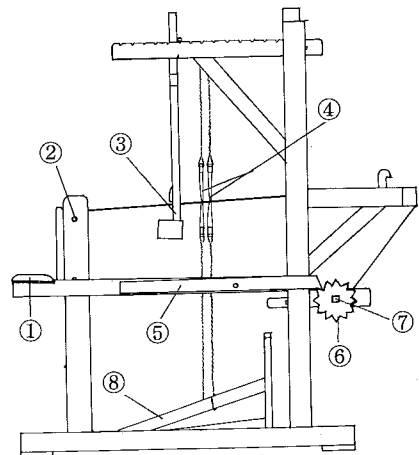


図2) 高機

- ①腰板 ②布巻 ③箠 ④綜糸 ⑤経張り棒  
⑥菊 ⑦緒巻 ⑧踏木

おなじなのだが、ほかの機械はちがう」と述べているのだらうと思います。』

「Frameless-loom」とは、機台のない織機のことを指す。この織機には、経糸保持、開口、緯入、緯打の四つの要素を満たす道具が見られる。しかし、道具と言っても単なる棒の集まりであり、経糸保持の場合も、一方は道具によるが、他方は織手の腰によって糸の張り加減を調整する。このため、腰機（Back strap loom）と呼ばれるが、腰機は、機台のある他機も含めて考えるため、特に機台のない織機は原始いざり機と呼ばれている。このようなスタイルの織機は、東アジア・東南アジアや中南米などに主に分布している。また、わが国では、静岡県登呂遺跡や大分県安国寺遺跡からの出土品によって、弥生時代すでに経糸保持具、開口具、緯入具、緯打具などの道具のそろった Frameless-loom 織機が存在していたことが分かっており、これは、また弥生機とも呼ばれている。この他、アイヌ民族使用の織機、八丈島のカップタの織機、石川市伊波の伊波メンサーを織る織機が Frameless-loom のなごりをとどめている。



写真1) 伊波メンサーの織機

朝鮮漂流民の報告した織機を考察するには、当時の朝鮮の織機がどのようなものであるか、特に織機の構造として、機台があったかどうか、箴や杼がどのような役目を持っていたか重要なポイントとなる。田中は、「当然十五世紀の朝鮮の織機はこの「いざり機」であったと断定して、少しも危険でないと思われず」と述べており、図3にみられる

ような織機であったことを示唆している。

沖縄の他機（図1）と図3を比較してみると、開口具のひとつである中筒と、緯入具の杼の形が異なり、図1の織機には見られない機台の後脚がある。実際に図3の織機を調査したことがないので推測の域を出ないが、経糸保持の方法・開口方法・緯入方法は基本的に同じであるが、緯打ちの方法が異なるように思える。沖縄の場合は刀状の杼が緯入と緯打の両方の役目を果たしていたのに対して、朝鮮の杼では、緯打は不可能であり、写真資料などから判断するに、緯打は箴によるのではなかないと思われる。

箴とは、一般的に「布の幅を一定に保つ」役割を持つもの、整経具のことである。高機の場合、これに緯糸を織前に打ち込むという役目が加わる。杼は、高機の場合、緯糸を

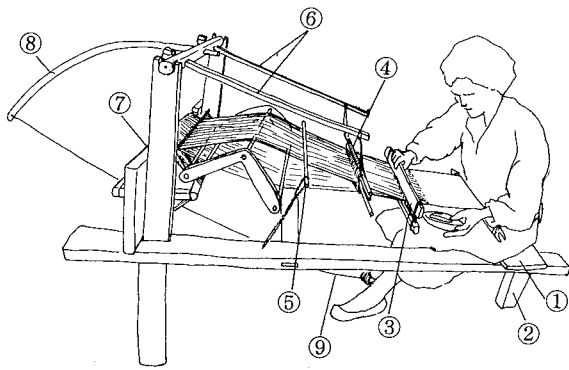


図3) 韓国の織機

①座板 ②後脚 ③箴 ④綜糸 ⑤押紐 ⑥棒 ⑦緒巻 ⑧牛尾  
⑨鞋紐 \*『月刊 韓国文化11月号』(1986年)より作図

送る役目を、地機では、緯入と緯打という役目を同時に行う。このように箴と杼は地機と高機では役割が異なる。与那国島で使われていた織機の箴と杼は、朝鮮の機械と同じだということであるが、当時の朝鮮の織機が刀状の杼でなかったと断定することは資料不足のためできない。いずれにしても、図1の地機や台湾の織機から推察するに、与那国で使われた箴と杼

は、図3のように緯入と緯打ちが分離したのではなく、杼によって緯入と緯打ちが同時に行われ、箴は布目を揃えて、布幅を一定に保つたためのものであったと考えた方が妥当であるが、しかし、敢えて、「同じ」と報告しているところから、緯打ちは箴によっていた可能性もないこともない。

また、「その他の機械は違う」ということが、果たして機台があるかないかという点なのか、開口具の違いなのか、この文面だけでは判断がむずかしい。伊波メンサーの織機が、現存していることから考えて『李朝実録』に出てくる与那国の織機が、機台のないものだったとしても、15世紀当時の沖縄に普及していた織機が、全て Frameless-loom であったとは言えないし、また田中も『沖縄織物の研究』でそう述べている。

次に文献資料に織機が登場するのは、中国からの冊封使副使であった徐葆光が著した『中山伝信録』で、これにより、機台のある織機が、少なくとも18世紀初期にあったことが分かる。

## 織 具

機形坐處窄外寛。高一尺五六寸。低着脚。僅三四寸許。機前立竹竿一下垂。引扣下上。梭長四寸餘。如臯角形。器用輕小。席地爲便。家家有之。縷蕉絲雜紵織之。

この文には、徐葆光と同行した福州の画人陳利州によって、写真2の挿し絵が描かれており、この記述と挿し絵から、田中は沖縄の地機との相違点を次のように指摘している。

- ① 沖縄の地機にはない機台の後脚がある。
- ② 経糸保持具の布巻き・緒巻きの位置が『中山伝信録』の織機は高い。
- ③ 沖縄の地機に見られる中筒がない。
- ④ まねきが竹竿である。

- ⑤ 縄による脚引きではなく踏み木がある。
- ⑥ 長さ四寸の杼は刀状杼とは考えられない。
- ⑦ 緯打ちが、箒による。

この織機について田中は中国の概念で描かれたもので、この織機の構造が、織物発達史において極めて重要なものであろうことは認めているが、「沖縄のいざり機とはいえない」と述べている。

19世紀後期から20世紀初期には、機織り、布巻き、その他の織りに関する作業の様子を描いた風俗図が数多く見られる。八重山蔵元絵師であった喜友名安信（1831～1892年）の画稿（石垣市立八重山博物館蔵）、仲宗根真補（1843～？）作の「琉球風俗図」（ハワイ大学宝玲文庫蔵）、久場島清輝（生没年不詳）作の「織婦図」、昌興（生没年不詳）作「琉球風姿画全」、筆者不詳「樹下織婦図」などである。八重



写真2) 『中山伝信録』



写真3) 琉球風姿画全

山蔵元絵師の画稿と琉球風姿画全には図1と同じ地機が描かれており、この機は統計資料から高機が普及するまで沖縄の各地で使われていたことが分かっている。

表1の統計は島尻郡のみで、織物の大型産地であった那覇・首里・宮古・八重山の機台数が分からないが、高機の台数が次第に増加しており、高機導入の時期を明確にすることはできないが、普及したのはこの時期（明治40年代か）と考えて妥当だと思われる。また、大正4、5年の統計表の機の種類の項目に「力織機」「足踏機」「高機」「地機」とあり、この時期に地機、高機とは別に足踏機・力織機が導入されていたことが分かる。

足踏機は、「踏み木を踏み、開口、杼投、箒打ち、巻取などの運動を行なう織機」（JIS繊維用語）のことで、力織機同様に生産効率を高めるため、導入されたものと思われる。しかし、首里・那覇、島尻郡などの一部の織物産地での導入であり、全島へ普及するには至っていない。

年代	高機	地機
明治40年	12	4,667
明治41年	31	4,929
明治42年	50	4,112
明治43年	75	4,072
明治44年	135	4,606

表1) 地機・高機台数 (『島尻郡治要覧』より)

年代	手織機	足踏機	高機	地機	力織機
大正4年		13	984	15,428	
大正5年	24,639	20	2,920	21,699	20
大正6年	28,727	—	—	—	20
大正7年	32,376	—	—	—	20
大正8年	31,780	—	—	—	19
大正9年	31,420	—	—	—	20

表2) 織機台数 (『沖縄県統計資料』より作表)

\*手織機は足踏機、高機、地機を合わせた数字である

## おわりに

今回は、文献資料等から沖縄の織機を考えてみたが、実物資料に置き換えて考えると不明瞭な点が多く、今後、綿密な実物調査及び聞き取り調査を行なわねばならないと感じた。織物の産業化により作業行程の簡略化が求められ、織機または道具も、それにともない常に変遷している。特に近年著しいものがあり、早急に博物館等施設に資料として残されている実物資料の調査はもちろん現状の把握が必要課題である。

## 文 献

吉本忍「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告12館2号』(1987年)

重松成二「日本の手織機・分類と地方的特徴」『染織 α』(1985年)

田中俊雄・玲子『沖縄織物の研究』

『沖縄縣島尻郡治要覧』島尻郡役所(大正2年)

『沖縄県統計資料』

李宗碩「苧布(モシ)織技術」『月刊 韓国文化』自由社(1986年)